

異世界の本屋さんへようこそ！

3

ランドール

蓮の持つ<白騎士の書>の番人。
豪快で気持ちの良い男だが、
蓮には何か含むところがあるようで……？

ジャストワ

心配性で過保護な魔術師。
常に肩に小さなカエルを
一匹のせている。

ミカジ

魔槍の使い手である、
金髪碧眼の美人。
姉御肌で、女性には優しく
男には容赦がない。

カルドゥ

淡水の二の国の宰相にして、
ルーエン・ディーの叔父。
ルーエン・ディーを心配している。

リヒト

アウラ・エル国立大図書館
の司書長。嘘がつかない、
無愛想な堅物。
女性が少し苦手。

登場人物紹介 Main Characters

ルーエン・ディー

アウラ・エル国の国王。
なにかと蓮の面倒を見てくれる
超美形。蓮が本屋を始める
きっかけくれた大恩人。

マチガエル

蓮に懐くカエル。
とんでもなく
迷惑な能力を
秘めている。

ジョー

子供の雷竜。
本屋のお手伝い
もできる賢い子。

相葉蓮

ある本がきっかけで突然異世界
トリップした本を愛する書店員。
中性的な顔や男っぽい言葉づかい
から、よく男性に間違われる。
前世の謎に興味を持ち始めて……

目次

プロローグ	7
第一章 真夜中の訪問者	28
第二章 番人登場	72
第三章 黒の王と白騎士	135
最終章 幸福の本屋さん	218
エピローグ	288

プロローグ

氷の季、孔雀緑海の月の一日。

「こんばんはー、どうぞごゆっくり店内をご覧ください」

異世界でも、書店の夜はそれなりに混み合う。

家族連れや仕事帰りの人、恋人、友達同士など組み合わせも色々だし、若い人から年配の方まで年齢層は幅広く、店内は賑やかだ。

地球から遠く離れた、無限銀河三系、（白騎士の星）。

地球生まれ・地球育ちの書店員、相葉蓮が店長を務めるこの店は、ここ——アウラ・エルで唯一の本屋だ。

店の看板にはこう書かれている。

『白騎士の本屋さん』

店を訪れるお客の目的は様々で、本を買うつもりのお客もいれば、暇潰しに来ただけのお客もいる。また、待ち合わせ場所としても利用されていた。

扉がゆっくりと大きく開き、のっそりと現れたのは常連客だ。

「いらつしやいませ、ローハンベルク様。なんだか楽しそうですが、いいことでもありました？」
レジカウンターに立つ蓮の問いかけに、人狼族のローハンベルクは齒をむいてニヤリと笑った。

彼は灰褐色の狼で、ふさふさの毛並みに立派な尻尾を持ち、二足歩行をしている。警備隊員の赤いコートを着用したままなので、仕事帰りに立ち寄ったのだろう。この世界では、狼族や羊族なども人間同様に働き、生活している。

「いいこと、というほどでもないが、雪が降りそうなんだな。俺は寒いのが好きなんだ」

「なるほど。私は雪なら好きですけど、寒いのはどうも苦手です。本日はどのようなご用件で？」

「ああ、メリーの代わりに本を取りに来た。これは預かってきた控えだ」

蓮は差し出された客注控えを受け取り、背後の客注棚から注文品を取り出した。

「こちらの詩集二冊、ご注文の本で間違いないでしょうか？」

「あー……俺が預かった控えと書名が一緒なら、大丈夫だろ」

「念のため書名のご確認を。間違いないでしょうか？ では、お包みいたします」

蓮は、本に丁寧にカバーをかけながら、懸念していたことを訊いた。

「最近、風邪が流行っているようですが、メリー様も体調を崩されたのでしょうか？」

「いや、単に仕事が忙しくてここに来る暇がないらしい。早く読みたいのに、つてしよぼくれていたんでな、俺が野暮用ついでに寄ったんだ」

ローハンベルクはぶっきらぼうな態度だが、根は優しい。彼が幼なじみである羊族のメリーの代理で本を買いに来るのは、これが初めてではないのだ。野暮用があろうがなからうが、メリーのた

めならローハンベルクはいくらでも都合をつけて来ただろう。蓮はそんな確信を持って微笑んだ。
「……メリー様は、こちらの本の入荷を大変心待ちにしておられましたので、きつと喜ばれますよ」

「そうか？ まあ、本の受け取りぐらい、たいした手間じゃないからな」
平然と呟くローハンベルクに釣銭を渡しながら、蓮はさらりと言った。

「メリー様は、ローハンベルク様のような頼りがいのある幼なじみがいらつしやって幸せですね」

「からかうな」

「本心ですよ。はい、商品はこちらです。ありがとうございます。どうぞメリー様にもよろしくお伝えくださいませ。次のお越しをお待ちしております」

「ああ、またな」

金色の眼を輝かせて、彼は軽く手を上げた。ぶん、と大きな尻尾が横に揺れる。会ったばかりの頃は異様に思えた後ろ姿も、いまでは見慣れてたくましく好ましいものに見える。蓮が聞いた話では、人狼族は人間と狼族の混血種のため、自分の意思で狼にも人間にも変身できるらしい。だが、あいにくと彼が人間になったときの姿はまだ見たことがない。

「……いつか見せてもらえるかなあ」

蓮は独り言を呟いた。あくまで想像だけれど、狼の姿があれだけ強そうで凛々しいのだから、人の姿になってもさぞや雄々しく恰好いはず。機会があれば、ぜひとも見てみたいものだ。

生粋の地球人である蓮がこの異世界に来て、一二〇日が経った。右も左もわからない異世界で暮

らすことにもようやく慣れてきた。

そもそも蓮の実家は創業八〇年の老舗本屋で、蓮は幼い頃から本に囲まれて暮らしていた。そのおかげか、とにかく本が好きで、短期大学卒業後の進路は迷わず家業を継ぐ道を選び、念願の書店員となった。

そうして日々真面目に書店員修業をしていた蓮が、なぜ異世界に来るはめになったのかというと、突拍子もない話だが、ある本が関係している。

この世界に来た日のことを思い出した蓮は、制服のポケットから一冊の本を取り出して眺めた。普段から肌身離さず持ち歩いている、深紅の革表紙の小さな本。

表紙には、金色の文字でこう書かれている。

〈白騎士の書〉

このいわくつきの本が、ある日突然、蓮を異世界へ連れ去ったのだ。

実家の本屋に届いたこれを開いたことがきっかけで、蓮の運命は思いがけぬ方向に曲がった。気がついたときにはすでに地球を飛び出し、問答無用で異世界——〈白騎士の星〉へと運ばれていったのだ。

生まれ故郷の地球と〈白騎士の星〉を結ぶのは、宇宙を走る船列車^{ふねれっしゃ}。

その乗船切符は、なんとカエル。カエルが乗船切符に化けるのである。

この世界では、特殊な力を持ったカエルが生活の一部として使われているのだ。

蓮が到着した星には、本屋がなかった。それだけでも衝撃的なのに、その上、この星で人々との

縁を結ぶまで帰れないと告げられた。

筋金入りの本好きとしては、本のない生活、本屋のない世界なんて耐えられない——だから「本屋を作ってくれないか」と依頼されたとき、蓮に断るなんて選択肢はなかった。

それから不慣れた異世界で本屋を開くために奔走し、一から本屋を作ったのだ。まだまだ改善の余地のある店だけれど、なんとかここまでやってこられたのは、いい仲間たちに恵まれたからだろう。

ルーエン・デイーにジャストワ、ミカジ、リヒト。それになにかと手助けしてくれる小人族や図書館司書たち、店を支えてくれる多くの常連客。

彼らとの縁が結ばれて親交が深まるにつれ、蓮はどんどんこの世界を好きになった。日々の生活から〈白騎士の星〉との繋がり^{つながり}を得て、いまや、いつでも地球に帰れるようになっていく。それなのにいまでもここに留まっているのは、店への愛着はもちろんのことだが、彼らと別れ難い気持ちもあり、帰還する決意がなかなかつかないためだ。

とりとめのない回想にふけていた蓮だが、不意に名前を呼ばれた。

「レン、ちょっといい？」

蓮が振り返ると、レジカウンターにスタッフの一人、ミカジが入ってくるどころだった。

「児童書コーナーの前にいらっしやる小柄なご婦人が、書名のわからない絵本を探しているそうなの。話を聞いてもらえますか？」

ミカジは誰もが認める妖艶な金髪美女で、いつも生き生きと輝く碧眼の瞳には、気風のよさが滲^{にじ}

み出ている。スタイルも抜群で、胸の豊満さや脚線美は、制服の上からでもはつきりわかるほど。

そんなミカジの性格はといえば、豪胆の一語に尽きる。常に快活ではきはきと喋り、物怖じすることがない。子供と女性には親身になる反面、男性には手厳しく、彼女の容姿に魅了されて寄ってくる輩などはほぼ一刀両断される。名うての魔槍の使い手で、出会ったばかりの頃からなにかにつけ味方をしてくれるミカジを、蓮は本心に強く思っていた。

「了解。代わります、レジをお願いします」

蓮が児童書コーナー前に行くと、クリーム色のコートに山吹色のベールを着用し、腰をやや曲げた高齢のご婦人が困ったように佇んでいた。彼女は片一方の手で杖をつき、杖を持っていない方の手には、買い物袋を下げている。

「こんばんは。お待たせいたしました、お呼びでしょうか？」

声をかけると、ご婦人は蓮を見て申し訳なさそうに言った。

「お忙しいのにごめんなさいね。孫に頼まれたんだけど……うっかり本の名前を忘れちゃったのよ。なんとかっていうシリーズものの三冊目で、お姫様とカエルが活躍するお話なんですって」

「ああ、それでしたらこれですね。『おかしなくにおひめさまとかえる』シリーズで、三冊目は『おかしなくにおひめさまとかえるのぼうけん』です」

蓮が棚差しにしてあった二冊をスツと引き抜き表紙を見せると、ご婦人は嬉しそうに笑う。

「まあまあ、すぐわかるのねえ。ありがとう、助かりましたよ。これで孫も喜ぶわ」

「贈り物用に包装いたしますか？」

「そうねえ、お願いしようかしら」

「かしこまりました。ではこちらへ、ご会計を先にお願いたします」

蓮はご婦人が手首にぶら下げる買い物袋に眼を留めた。杖をついて歩くものの、荷物が重いのか足取りがふらついて危うい。いまにも転びそうだ。

「ジョー、おいで」

「じよー」

蓮の呼びかけに低いダミ声で返事したのは、雷竜のジョーだ。

元は〈白騎士〉の竜で、いまは蓮に懐き『白騎士の本屋さん』の看板竜となっていた。身体の大きさを自在に変えられる能力を生かして、一日の大半を蓮の傍で過ごしている。

天井の梁にいた銀灰色の竜は、翼をパタパタと動かしながら蓮の肩にちょこんと降りた。クリツとした大きな銀の竜眼を瞬かせ、あどけないしぐさで小首を傾げる。

「じよ？」

「こちらのお客様のお伴をして、荷物を運んでおいで。落とさないように、しっかり持つこと。できるね？」

「じよ！」

ジョーは非常に利口な竜で、蓮の言葉を的確に理解し、概ね素直に従ってくれる。看板竜として愛想を振りまく以外にも、店内のゴミ拾いと整頓のお手伝いもするし、ときには近所の子供たちに囲まれて遊び相手（たまにケンカになる）になった。最近では、重い本を買ったお客の荷物持ちと

しても活躍している。

元氣なジョーの返答に満足し、蓮は包装を終えた本を袋に入れながらご婦人に話しかけた。「お客様、よろしければ当店の竜がご自宅までご一緒に本をお届けします。ついでですので、そちらのお荷物も持ちましょう」

ご婦人は蓮の申し出に驚いて最初は辞退したものの、ジョーのやる気を見て、戸惑いつつも荷物を預けた。ジョーは荷袋の持ち手をくちばしでパクリと噛み、難なく飛ばす。

「ありがとうございます、またのお越しをお待ちしております。ジョー、頼んだよ！」

蓮が店の扉を開き、ご婦人と荷物持ちとしてついていく竜のジョーを見送っていたところ、背後から野太い声で挨拶された。

「よ、店長さん」

振り返ると、ブロonzの作業着の上に厚手の上着を着込み、作業帽を目深に被った眼つきの悪い巨漢が白い息を吐きながら立っていた。

「タズマ様！ こんにちは、ご来店ですか？」

タズマは常連客の一人で、厳つい見た目に似合わず愛読書は児童書だ。基本的に自分で本を選ぶことはなく、蓮のすすめる本を購入し、読了したらまた買いに来るというスタンスで頻繁に店に足を運んでくれている。近頃では彼と顔を合わせ、率直な感想を聞くことも蓮の楽しみとなっていた。「いや、仕事帰りにたまたま通りかかったただけだ。今日はこれからちよつと野暮用があるからよ、また来るわ。なんか面白え本、適当に見繕っておいてくれや」

「了解です。前回は評価が振るわず残念でしたが、次こそ面白いと唸らせてみせますから」

「おう、楽しみにしてるわ。またな。そうだ、ちっこい竜にもよろしくな」

タズマはジョーがお気に入りで、店に来ては必ずひと声かける。だが、ジョーはなぜか彼のことを警戒していて、微妙に距離を置くのだ。ジョーに近づけば近づくほど逃げられる姿が不憫でなんとかしてあげたいと思ひ説得するのだが、いまのところ功を成していない。

「レン、お客様がお帰りですよ。お通ししてください」

タズマを見送っていた蓮は、ジャストワの指摘にハツとして脇に退いた。どうも出入り口を塞ぐように立っていたらしい。慌てて頭を下げる。

「失礼しました。ありがとうございます、またどうぞお越しくさいますませ」

失態を反省しつつ蓮が店内に戻ると、ジャストワが気懸かりそうな顔で傍に寄ってきた。

「どうかしましたか？ 外でなにか？ 酔っ払いなら私が排除しますよ」

ジャストワは艶のある長い銀髪を一つに束ねて胸元に垂らし、理知的な青い瞳に眼鏡をかけた、眉目秀麗な魔術師だ。蓮より頭一つ分背が高く、左肩には常時ヨミガエルという『自分以外の死者を一度だけ甦らせる』ことができる特殊なカエルをのせている。

彼は魔法が必要な事態となれば、細い棒状の魔法の杖を振りかざして解決してくれる頼もしい味方だ。ミカジ同様、最初の出会いのときからずっと蓮を守ってくれている。

心配性で過保護なため少々口うるさく感じるときもあるが、蓮の身辺を気遣い、不便がないように心を砕いてくれる面倒見のいい人だ。彼が世話を焼いてくれたからこそ、生活習慣や地理のこと

なども含め、蓮はここでの暮らしに馴染めたのだ。

蓮は軽くかぶりを振って答える。

「違います。ご常連のタズマ様が店の前を通りかかったので、少しお話をしていただけです」

「そうですか。でも、もし酔っ払いらしき輩を見かけたら、絶対に私に声をかけてくださいね」
険しい声で念を押されるのには理由がある。

つい先日、店の前で酔っばらい同士の小競り合いがあった。そこで蓮が仲裁に入ったところ、突き飛ばされて尻もちをつき、手を擦り剥いたのだ。すぐにジャストワが救援に駆けつけてくれたので事なきを得たのだが、「無茶をしないでください」と説教されてしまった。ミカジはミカジで蓮の手当て中、終始無言で薄ら寒い笑みを浮かべていたことは記憶に新しい。おそらく蓮がなだめなければ報復に出ただろう。

そんなことをふと思いつつ、蓮はちらりとカウンターを見る。

カウンターでは白い制服にリーフグリーンのエプロンを着用したリヒトが、今日の売り上げ分のスリップを束ねてパラパラと捲っているところだった。

リヒトはアウラ・エル国立大図書館の司書長を務めながら、この店で書店員として働いている。

灰色の髪をさっぱりと短く切り揃え、意志の強そうな凛として澄んだ灰色の瞳の彼は、精悍な容姿の好青年。内面も外見の印象通り、堅物で正義感と責任感が強い仕事熱心な男だ。

リヒトはちよつとぶつきらぼうで愛想がないという難点があったものの、改善しようと努力した結果、開店当初に比べてだいぶ丸くなった。本に関する知識という点では抜きん出ている、店頭の

品揃えや売れ筋商品の見極めなどは彼に頼ることが多い。蓮にとっても店にとっても、なくてはならない存在だ。

「リヒト」

「な、なんだ？」

蓮が名を呼ぶと、リヒトはびくつとして顔を上げた。

「どうして後ろに下がるんだ？」

「いや、別に逃げてなんていない。あんたの気のせいだ」

誰も逃げたとは言っていない。

蓮がじつとリヒトを見つめると、途端にリヒトの眼が泳いだ。心なしか焦っているように見える。

「……」

リヒトの様子が近頃おかしくなったのは、ある意味、蓮が原因だ。

蓮は、小さな頃から年の離れた兄二人の後を追いかけて、なんでも真似をして育つたため言葉遣いや振る舞いが男っぽい。加えて女性にしては背が高い方で、髪も短く、凹凸もささやかなので、二十一歳になったいまでも男性と間違われることがある。

実際、つい最近までリヒトも蓮のことを男性と思い込んでいて、女性だと打ち明けたときにはとんでもなく驚いていたのだ。その翌日から、リヒトの態度は眼に見えて変化した。蓮に対し明らかによそよそしくなり、声をかければギクリとし、近づけば尻込みする。他の女性客には普通に接しているのに、蓮に対してだけぎこちないのだ。

……仕事がやりにくい。

数日経てば元に戻ると思っていたのに、この状態が続けばいずれ業務に支障が出る。いや、すでに出ている。話し合いが必要だ。それも早急に。

「あら、睨み合い？ ケンカなら私も混ぜてもらおうかしら。もちろん、レンの味方で」

接客を終えたミカジが戻り、蓮とリヒトの間に漂う気まずい空気を読んで、からかうように口を挟む。

蓮はじろりとリヒトをねめつけながら、前髪に指を通して掻き上げた。

「……ケンカじゃないです。リヒト、あとで話がある。逃げるなよ」

「だから逃げてねえって」

反発しつつも露骨に眼を逸らしたリヒトに、蓮は溜め息をついたのだった。

閉店後、帰り支度を済ませて店を出る頃、二〇時半を過ぎていた。外は寒く、冷気が肌を刺す。

蓮は首を竦めながらコートの襟を立て、すぐ近くで店に背を向けて帰ろうとしているリヒトの横に並んだ。

「待った。あとで話があると言っただろ。少しどこかに寄っていかないか？」

「俺と？」

「うん」

リヒトに断る隙を与えず、蓮は店から出たばかりのミカジとジャストワを振り返って宣言する。

「リヒトと二人でちよつと話してから帰ります」

だが、ミカジとジャストワはいい顔をしなかった。「安全上問題がある」と渋り、「一緒に行く」と言っただけでなかった。だが「帰りはリヒトに家まで送ってもらうから」となんとか説得し、眉間に皺を寄せて心配そうに竹む二人に手を振って別れる。

「寒っ」

空には黒い雲が重く広がり、いつもは蒼白く瞬く星は覆い隠されて一つも見えない。時折髪を乱す風は湿気を帯びて冷たく、これから三ヶ月続く氷の季の、厳しい寒さを予感させた。

蓮は手袋をはめた手を擦り合わせ、はーつと息を吐きかけながら傍らのリヒトを見上げる。

「どこに行く？」

「っ、おい……上目遣いはやめろ。と、とりあえず食堂街に向かうぞ」

なぜか眼元を赤くし、リヒトは不機嫌そうに促した。異論はなかったのでおとなしく従うことにする。

日が暮れて闇に沈んだ食堂街は、昼間とは違う顔を見せていた。店の軒先に吊るされた角灯は鈍く橙色に灯り、屋根の上の煙突からは白い煙が立ちのぼる。扉の隙間からは、酔客の笑い声が漏れ聞こえていた。

夜遊びなんてしたことのない蓮は、物珍しさのあまりキョロキョロ見回してしまふ。

「夜の食堂街ってこんなに賑やかなんだ」

管を巻く酔っ払いや厚着して呼び込みをかける客引き、煙管を啜えつつ立ち話をする労働者たち、

腕を組んで歩く恋人同士、討論しながら歩く集団などで、路上は混雑している。

人混みを縫うように歩いていたりヒトは後ろを見て、注意力散漫な様子の蓮に言った。

「あまり余所見よそみをして歩くなよ。ぶつかるぞ」

「うん、わかった。あ、あれおいしそう。うわ、こっちからもいい匂い」

「……腹すが空いているなら、なにか食うか？」

「賛成！ せっかくだから、温かくておいしいものがないな」

蓮が嬉しそうに即答すると、リヒトは少し考えてから提案してきた。

「温かくてうまいものか……鍋はどうだ？」

「鍋！ いいね、鍋。異世界にも鍋物つてあるんだ。どんなのか楽しみだー」

「この先に俺の行きつけの店がある。鍋で出す煮込み料理が名物なんだが、そこでいいか」

もちろんと返事をしてすぐ、蓮はリヒトに連れられて表通りから裏路地に入った。途端に人の数
が減り、歩くのが楽になる。路地には空腹を誘う匂いを漂たわせる小さな飲食店が立ち並び、その照
明灯のおかげで周囲は仄明ほのかる。道幅が狭いため、人とすれ違うたびに蓮はリヒトの大きな背に庇
われた。

リヒトは、ある一軒の店の前で足を止める。

「ここだ。入り口が段差になってる。足元に気をつけるよ」

二人が案内されたのは個室で、中央に使いこまれた木造の椅子とテーブル、部屋の隅には華奢みやびな
脚の小卓があり、カエル型のブロンズ時計が置かれていた。

「なんで個室？」

蓮が疑問を口にすると、リヒトから明快な答えが返ってくる。

「あなた、目立つから。ここで待ってる、適当に注文してくる」

リヒトが席を外したのはほんの五分程度で、すぐに戻ってきた。彼は蓮の向かいに腰かけたもの
の、片肘をテーブルにのせて身体を斜めにずらし、視線を合わせようともしない。

沈黙に痺しびれを切らした蓮は、指でコッコツとテーブルを叩いた。リヒトが首を動かさず器用に視
線だけ向けて、仏頂面の蓮を捉える。蓮はそんなリヒトに対しポツポツと弁解した。

「……女性だと黙っていたのは悪かったけど、別に騙だましていたわけじゃないよ。リヒトが気づくま
で黙っていてくれて皆に口止めたのも、悪気があったわけじゃないんだ。その方がリヒトも私
と付き合いやすいのかなと思っただけで、でもリヒトが気分を害したなら謝るよ。ごめん」

「あなたが謝ることないだろ……悪いのは俺だ。ずっと勘違いして、あなたに嫌な思いをさせた」

リヒトは思い詰めた顔で蓮に向き直り、両腿に手をおいて深々と頭を下げた。

「すまなかった。どうやったら償なぐさえる？」

「そんなおかげさな。リヒトが気にするほど私は気にしていない。償いなんていらないよ」

「それじゃあ俺の気が済まない。俺、あなたに、その……まずいことを何度もしているし……」

「まずいこと？」

意外なセリフにポカンと訊きき返すと、リヒトの頬に血が昇った。彼は蓮から眼を逸らし、片手で
口元を覆ってやや俯うつむく。視線はさまよい、床を這はっている。

「……身体に触ったり、近づき過ぎたり、あんたが熱で倒れたときなんて、ね、寝間着を……」
言いにくそうに口ごもるリヒトの前で、蓮は思い出した、とポンと手を打った。

「そういえば、いきなり寝間着を脱がされたっけ」

リヒトが、疲労で倒れた蓮を見舞いに来たときのこと。着替えの手伝いを申し出た彼は、蓮の寝間着の紐をほどいて脱がしたのだ。だが、すぐにルーエン・ディーが引き離したので、そんなに身体を見られずに済んだのだが。

「大丈夫、気にしてないから」

「あんたが気にしていなくても俺は気にするんだよ！ くそっ、なんでそんなに危機感がねえんだよ。あんた女だろ!? もっと怒れよ！ 恋人でもない男に裸を見られたんだぞ!？」

「いや、だって、リヒトだし。勘違いしただけで下心がなかったのはわかっているし、それに、あの場にはルーエン・ディーもいたわけで……」

「そういう問題じゃねえんだよ」

リヒトは耳まで赤くしてテーブルに突っ伏した。普段なら考えられないような彼の乱れっぷりに、蓮はなにかいけないものでも見たような気持ちになって、リヒトに詫げる。

「……えーと、なんか、悩ませて、ごめん」

「だから、謝るのは俺だ。あんたじゃねえって!」

「逆ギレ反対!」

そこへノックがあり、「失礼しまあす」と若い女性の声が届くと同時に扉が開き、香ばしい匂い

の料理が運ばれてきた。テーブルに鍋と大皿が次々と並べられ、取り分け皿と調味料、カトラリーが用意される。

「鍋は貝ダシに鳥と根菜、揚げ物は小エビと尻頭付おかしらつきの魚、焼き物は三種類の肉串、茹ゆで野菜と茶碗蒸し、飲み物は果汁です。どうぞ熱いうちに召し上がってくださいねー」

ほかほかと湯気の立つおいしいそうな料理を前に、蓮は一時休戦を申し出て、グラスを持ち上げた。

「……とりあえず、食べようか」

「……だな」

しばらく食べることに専念する。休憩時間に軽く食事はとったものの、思いの外ほかお腹が空いていたようだ。料理はリヒトの行きつけの店というだけあり、申し分なくおいしい。鍋を空にしたところで、蓮は向かいに座るリヒトを見つめて告げる。

「とにかく誤解だの間違いだの、諸々の件ちゆうごは水に流して、いままで通りに付き合っしてほしい」

リヒトは探るように蓮を見つめ返し、肉を咀嚼そじやくし呑み込んでから言った。

「……あんたがかまわないなら、そうする」

「……どうやら無事、元の関係に戻れそうだ。」

すっかり嬉しくなった蓮は、無邪気な顔でニコッと笑った。

「おい、そういう隙だらけの顔で笑うのはやめろ。特に男と二人きりのときは絶対にするな」

「は？ 隙なんてないし。それに男性と二人きりになる機会は滅多にないよ」

蓮が心配ご無用、と軽く受け流すと、リヒトは呆れ顔で重い溜め息をついた。

「……くそっ、段々わかってきたぞ。俺も鈍いかもしれんが、あんたも相当だ」

「リヒトは鈍いだろうけど、私はそんなに鈍くない。一緒にしないでくれ」

「いや、鈍いね。仕事中はともかく、女としてなら致命的に鈍いだよ。だいたい自分ってものをわかってないんだよ、あんたは。無自覚なのが一番性質が悪い……」

聞き捨てならない、と蓮は一瞬ムツと不機嫌になったものの、そういえば以前、ミカジにも似たようなセリフを言われたことを思い出した。

微妙な顔をしている蓮に、リヒトはまた溜め息をついて言った。

「……まあいい。あんたの気持ちはわかった。できるだけ、いままで通りにするよ。だが償いはさせろ。俺にできることならなんでもいい、言ってくれ」

「……なんでも？」

「なにかあるのか？ あるんだったら、もったいぶらずに言え」

催促されて蓮は頷いた。指を動かし、リヒトに耳を貸すよう合図する。彼が怪訝そうな面持ちで身乗り出してきたので、蓮はひそひそと囁いた。

「白騎士」のことにについて調べたいんだ。ミカジとジャストワには内密で」

「白騎士」とは「白騎士の書」の元の持ち主で、その昔、この世界を破滅から救った救国の英雄らしう。

伝承によれば「白騎士の書」が開かれるとき、それを手にする「白騎士」の転生者が、再び世界の危機を救うという。

目下のところ「白騎士の書」は蓮の手にある。蓮だけがこの本を開くことができ、他の誰にも見えない文字を読み、「白騎士」の力を使うことができるのだ。おまじないという名の呪文を唱えて。

「白騎士の書」は現在ほとんど空白で、ページを埋めることができるのは「白騎士」の言葉だけ。蓮が唱えるおまじないだけが、力を持った言葉として「白騎士の書」に刻み込まれてゆく――

リヒトが息を呑むと同時に肩がピクリと震える。話の内容が想定外だったのだろう、リヒトは訝しみながら慎重な口調で蓮に問い返した。

「なぜ急に？」

「急じゃないんだ。商店街祭りが終わってから、何日も考えていた」

自分で自分を、「白騎士」と認めた、あの夜。

商店街祭りの最終日、祝宴で盛り上がる街並みを眺めて、皆の幸せを祝いたいと願ったあの日。気がつけば「祝福のおまじない」と唱えていた。

そして「白騎士の書」を取り出して中を確認すると、空白だった一ページに祝福の言葉が刻まれていたのだ。

そのとき口にした言葉が、楔のように胸に打ち込まれている。

――だって私、白騎士さんですから。

蓮は真剣な表情でじつと耳を傾けてくれるリヒトから視線を外し、自嘲気味に笑った。

「私になにができるかわからないけど、いざというときのために「白騎士」のことも「白騎士」の

書』のことも、できるだけ知っておこうかなって思ってた。私、あまりにも知らなすぎるから」

「それで、どうしてミカジとジャストワに秘密にする必要があるんだ？　言うまでもないけど、
〈白騎士〉について一番詳しいのはあの二人だぞ。なんたって〈白騎士〉の守り手だからな」

「そうなんだけど、でも二人の話を聞く前に自分で調べてみたいんだ」
いきなり核心に迫るのは怖い、とは言えなかった。

蓮は押し黙り俯く。ただ漠然と怖い、なんて理解してもらえないだろう。

リヒトは下を向く蓮の頭を小突こうと伸ばした。しかし手を宙で止め、ためらった末、引っ込める。

「別に……あなたが決めたなら俺が口出しすることじゃない。思うようにすればいいさ。俺が役立つことがあるなら、力になってやるよ」

「じゃあ、折り入って頼みたいことがある。図書館の地下書庫への出入り許可をもらいたい。ほら、はじめに案内してもらったときに言っていただろ？　『貴重な古書や珍本、学者の研究文献などを保管している』って。私が求める〈白騎士〉関連の情報を記した本は、重要文献に分類されているはずだ。それを見て必要な部分は写したい。許してもらえるかな」

蓮が真剣な顔で頼み込むと、リヒトは拒むことなく頷いた。

「わかった。地下書庫の書物の閲覧は、俺の権限で許可しよう」

「本当に!？」

「ああ。ただし、王家の図書の間はダメだ」

王家の図書の間は〈白騎士の書〉が保管されていた場所だ。他にも重要な〈白騎士〉関連の本がある可能性が高く、真っ先に探索しようとはひそかに決めていた蓮の計画は、さっそく頓挫した。

肩を落とす蓮に、リヒトは付け足す。

「どうしてもあの部屋に入りたければ、ルーエン・ディーに頼めばいい。王家の図書の間は王や王室関係者の許可があれば、入室も閲覧も可能なはずだ。あなたの件は俺の方から一応館長にも報告しておく。そうだな、今度の定休日にも来い。俺も付き合ってた」

「助かるよ。ありがとう、リヒト」

そろそろお開きにしよう、と蓮が椅子から立ちかけたとき、リヒトは苛立たしげにわしわしと頭を掻いた。

「……あんたさ、男の前であんまり無防備な顔を見せるなよ。誤解されるって。ったく……なんで俺がこんな心配しなきゃならねえんだよ。面倒くせえ」

「面倒くさいなら放っておけばいいだろ。私は大丈夫だよ」

「バカ、放っておけるか。大丈夫じゃねえから忠告してるんだ。おら、とっとと帰るぞ。送る」

リヒトは再び反論しかけた蓮をひと睨みして黙らせて立ち上がると、乱暴にコートを押しつけてよこした。

「あ、う、ちょっとお訊ねしてもいいですか？」

「はい、どうぞ。」

店の入り口近くで作業中の蓮に声をかけてきたのは、二十代前半のきれいな女性だった。薄い青のハーフコートに濃い緑のストールを合わせ、青いローヒールのブーツを履いている。耳にはなぜか小さなカエルのピアス。女性は恥ずかしそうに眼を伏せて続けた。

「……ええと、『愛の日』用の手紙の書き方の本なんてありますか？」

蓮はきよんとしてしまふ。

速やかな返答ができなかった蓮に代わり、脇から答えたのはミカジだ。

「はいはい、ございますよ。ご案内しますので、こちらへどうぞ。」

ミカジはにっこりと笑い、軽い足取りで女性を先導し実用書コーナーへ消えてゆく。

蓮は傍らのジャストワを上目遣いで見て質問した。

「……『愛の日』ってなんですか？」

「おや、知りませんでしたか？ 今月、孔雀緑海の月の九日は『愛の日』と言って、恋人や友人家族などの大切な人に贈り物をして愛を伝える日なんです。昨今では、贈り物に手紙を添えるのが一般的ですねえ」

初耳だ。

ジャストワの説明に、バレンタイン・デーのようなものかな？ と納得しながら、蓮はふと考える。

「——その贈り物って、どんなものでもいいんですか？」

「特にこれではいけない、という類のものはないですよ。愛の告白以外でよく贈られるのは花やお菓子、カエル。告白する相手にはちよつと高価な品というのが相場です」

なぜカエル、とは蓮は突っ込まなかった。

カエルが色々な用途で使用されるこの世界には、もしかしたら愛を謳うカエルもいるのかもしれない。

蓮は両手の指でこめかみを押さえ、閃いたばかりのアイディアについて考え込んだ。

急に押し黙った蓮を不審に思ったのか、ジャストワが眉間に皺を寄せて顔を覗き込んでくる。

「レン？ 難しい顔をして、どうしました？」

蓮は腕を下ろし、真面目な顔でジャストワの手を引くと、急いでレジカウンターへ戻った。

すると、さきほどの女性の案内を終えたミカジが、リヒトと業務の話をしているのが眼に入る。

「ちょうどいい、リヒトとミカジも聞いてください。突然ですけど『愛の日』フェアをやりませ

んか」

蓮の提案に、ミカジとジャストワ、リヒトの訝しそうな声が重なった。

「『愛の日』フェア？」

三人の顔を見ながら、蓮は頷いた。

「私はそんな日があるなんていまのままで知らなかったんですけど、大切な人に愛を伝えるための贈り物が花やお菓子やカエルでいいなら、本でもいいじゃないですか。コンセプトは『大切な人に贈る特別な本』——ということ、『愛の日』にちなんだ本を集めてフェア展開しましょう！」

最初にパチンと手を打ち合わせたのはミカジだ。

「賛成！ なんでもっと早く思いつかなかったのかしら。そうよねえ、花やお菓子みたいな消耗品より、本の方がずっと気が利いているわ。愛の言葉を綴った詩集なんて贈り物にぴったりじゃない」

次にジャストワが感心したように眼を輝かせ、パチパチと拍手した。

「なるほど、いいですね。花やお菓子やカエルだけでは味気ないけど、あまり高価なものは贈れない相手にもぴったりの品です。なせ、選択の幅が広いですから。相手の趣味嗜好に合わせた一冊が選べるんです。本は定番の贈り物になりますよ！」

リヒトは微妙に蓮と距離をおきながらも、眼から鱗が落ちたという顔で頷いた。

「面白い本だったら子供から大人まで喜ばれるだろう。本の普及にも繋がるな、やろうぜ」

全員一致で賛同してくれたことが嬉しく、蓮は笑う。ついで不敵に眼を光らせた。

「じゃ、さっそく取りかかろう」

「いまからかよ!？」

驚きの声を上げるリヒトに、蓮はきびきびと答える。

「だって、もう日がないじゃないか。宣伝は明日からするとして、売り場だけでも作っておかないと。というわけで、リヒトは店頭から書籍をリストアップして台車に積んでほしい。私はいま展開中のフェア台上の商品を撤去する」

「わ、わかった。見繕う」

だから、どうして気を抜くと返事がたどたどしくなるんだ。

蓮は詰りたい気持ちでリヒトを見てから、ジャストワに視線を向けた。

「ジャストワは『愛の日』に相応しい店内装飾のレイアウトを考えて、魔法で演出してもらえますか。全体的に赤やピンクの色使いで華やかにお願いします」

ジャストワは心得たと言わんばかりに、眼鏡の奥の青い瞳をキラッと輝かせた。

「ふふふ、了解です。とびきりロマンチックに華々しく飾ってみせようじゃありませんか！」

「それはちょっと……『愛の日』に関係なく本をお求めになるお客様が入店しづらくなるのはダメです。そこら辺を考えてよろしく願います。ミカジはレジにつきながら、宣伝ポスターとラッピングの仕様を考えていただけますか。今夜にでも小人族に発注を済ませて、即納入の手配をかけるので」

蓮がミカジに仕事を割り振ると、彼女は色っぽいウインクを投げてよこした。

「はあい、ま・か・せ・て。いいわあ、楽しくなってきた。今年の『愛の日』は忙しくなりそう。ねえレン、せっかくだからあなたも誰かに贈り物をしてみたらどう？」

「はあ!? —— ちょよ、ちょよと待て！」

ミカジの言葉に顔色を変えたのは、なぜかリヒトだ。彼は素つ頓狂な声を上げて、蓮を勢いよく振り返り、フロアにいたお客の注目を集めている。ここまで困惑を隠さないのは、どうもリヒトらしくない。いつもの泰然自若な彼はどこへいったのだろう。

「うるさいよ、リヒト。皆様申し訳ございません、当店スタッフがお騒がせいたしました」

蓮がお客に向かって腰を折って詫びる傍で、リヒトは俯き、手に持つ軍手を意味もなく揉みながら言った。

「す、すまん。いや、だって、あなたに『愛の日』に贈り物をするような相手がいるなんて、俺知らなかったから…… ちょよと動揺した。悪い」

「別に謝らなくてもいいけど、でもなんでリヒトが動揺するんだよ？ 私にだって『愛の日』に贈り物をしたい相手の一人や二人—— 三人四人—— いやもつとか？ いるに決まっているだろう」

「そんなに大勢いるのか!?」

「いたら悪いのか」

日頃お世話になっている人たちに感謝を示すにはもってこいの日だ。見過ごす手はないだろう。そう考えて蓮が平然と答えたところ、リヒトはいかにもシヨックを受けた様子で、虚ろな眼のまま踵を返し、ヨロヨロと文芸書コーナーの奥へ台車を転がしていった。

蓮は首を捻り、作業箱から自分の軍手を取ってはめながら、ブツブツ呟く。

「大丈夫かな、リヒト。この間からなにか変なんだよなあ…… 心ここにあらずっていうか、自分を見失っているっていうか。私のこともまだ避けている節があるし、なんなんだいったい」

ぼやく蓮の肩を、茶目つ気たつぷりの笑みを浮かべて軽く叩いたのはミカジだ。

「あんなの放っておきなさいよ。とうの昔に自覚していなきやいけない症状がいまごろやってきたってだけなんだから。まったく、気づかないなら気づかないで眠らせておけばいいものを、中途半端に寝た子を起こしてどうするのよ」

「自覚していなきやいけない症状って？」

「うふふ、レンは知らなくていいのよ。こつちの話」

ミカジは妙に艶っぽい表情なのに、眼が据わっている。拳を鳴らしているのはなんのためなのか。「だいじょーぶ、万が一リヒトがレンにトチ狂った真似をしたら、ナニを潰して再起不能にしてあげるから」

ミカジが怖い。

蓮は凄む理由を追及したくてミカジを見つめるものの、彼女はそれを曖昧な微笑でかわして包装紙力タログを捲り始めた。ジャストワはすでに店内を歩き、壁や天井を眺めながら装飾レイアウトの検討を開始している。

閉店時刻まであと数時間。蓮もひとまず雑念を振り払い、商品の撤去作業にかかった。

なんとか閉店までに『愛の日』フェアのコーナーを作ることができたので、蓮は満足だった。円形の大きな丸テーブルを三台寄せ集めて深紅の布で覆い、この上にリヒトが選別した本を並べている。更に面陳タワーをいくつか置いて装丁の美しい本を飾り、何枚かPOPをつけた。中央にジャストワの魔法で仕掛けを施した赤いハート型のオブジェを置き、オブジェの回りは楽器を持つおもちの兵隊の人形で囲む。

ディスプレイを確認したミカジが、赤い唇に指を這わせて蓮に笑いかけた。

「即席にしてはすてきじゃない？」

「まだ賑やかさが足りませんか……これでどうです？」

ジャストワが顎にあてていた指を離して、左手の中指と親指を擦り合わせる。

すると突然、おもちの兵隊がコミカルに動き出した。太鼓を打ちラッパを吹いて、フルートを響かせ軽やかな音楽を奏で始める。

リヒトは素直に称賛の言葉を口にした。

「なかなかいいな。白と金と赤の彩りがパツと人目を惹くし、もともと店内に吊るされているランプと組み合わせると明るさも温かみもある。派手すぎず地味すぎず、上等だよ」

自分もなにか言うべきだと思っただろう、床で身づくろいをしていたジョーが鳴く。

「じよ」

蓮も、がらりと趣を変えたフロアを眺めて感服したように頷いた。

「うん、休憩用の椅子やテーブルもアンティークで統一されて、重厚で高級感がある。豪華だけど

落ちついた内装は居心地がいい。ただ——」

蓮はフェア台の横に設置された立派なブロンズ像を胡乱な眼で見つめて、口を尖らせた。

「……どうして、ハイタッチのポーズのカエル像がここにあるんです」

ロマンチックな雰囲気がち壊した。

蓮の不服そうな声に、三人が顔を見合わせる。

疑問に答えてくれたのはジャストワだ。

「トリカエルが、『愛の日』には定番のアイテムだからですよ」

「……トリカエル？」

「はい、募る思いを言葉にしてトリカエルにぶつけると、トリカエルが美しい幻影と取り替えてくれるんです」

「どんなふうによ？」

「トリカエルに自分の気持ちをご告げした後、『トリカエル』とひと声歌えば、ぶつけられた言葉の量に応じて花弁や白い羽やら、虹やらの美しい幻影が生まれるんです。告白をロマンチックに演出してくれると大人気なんですよ。この像は幻影の代わりに別のものが出るんですけどね」

そう喋りながらジャストワがブロンズのカエル像にハイタッチすると、カエル像の開いた口からピーツと音がして、一枚の紙片が出てきた。

そんな仕掛けで動くと思わなかった蓮はびくっと震えつつ紙片を取って、書かれた文字を読む。

『愛は尊し』

…カエルに諭されてもなんだかなあ、と微妙な気持ちになるのは自分だけだろうか。
だが、ジャストワは得意げな様子でカエルの像を撫でている。

「こんな感じで、愛に関する標語がランダムに出てきます。『愛の日』ならではの、遊び心に満ちた演出でしょう？ 本当は跳ねさせたり元気よく歌わせたりしてもよかったです、賑やかすぎるのも粋ではないと思ひまして控えめにしました。どうです、レン？ 気に入りました？」

「はい」
そういうことにしておこう。

「あとは明日、開店前に小人族から宣伝ポスターが届く手筈ですので、それを貼れば完璧です」
不意にミカジが蓮に抱きつき、うきうきと弾んだ声で言う。

「成功するといいわね？」

蓮はミカジと眼を合わせ、次にジャストワとリヒトに視線を向けてニコツと笑った。

「一人でも多くのお客様に賛同してもらえるように、頑張りましょう」

「いらつしやいませ！ 『愛の日』に本の贈り物はいかがですか」

「はぁーい、ただいま 『愛の日』フェアを開催中です。どうぞお立ち寄りくださいな」

「お悩みのお客様、よろしければ私が本選びのお手伝いなどいたします」

「えー、店内のお客様にお知らせします。当店では明日までの期間限定で『愛の日』の贈答用ラッピングを承っております。ご希望のお客様はレジカウンターにてお気軽にお申し出ください」

蓮、ミカジ、ジャストワ、リヒトは広いフロア全体に響き渡るように声かけを続けながら、休憩時間返上で忙しく働いていた。

今日は氷の季、孔雀緑海の月の八日。明日九日は『愛の日』だ。

今月二日から突発的に展開した『愛の日』フェアだったが、予想外に好評を博し、連日盛況だった。目新しさと手頃な値段、種類の豊富さに加えて、確実に手元に残り、なおかつ男女問わず楽しめる物として本を宣伝した結果、まず若い女性が集まった。

女性の注目を集めたことにより口コミが広がり、他の客層にも火が点いたのだ。

このタイミングを逃さずに、蓮たちは数日前から攻勢に出た。制服を脱いでドレスアップしたミカジとジャストワがホスト役を務めて「『愛の日』に本の贈り物はいかがですか？」と触れまわったところ、一気に来店客数が跳ね上がった。

「毎度ありがとうございます。本屋さんお手伝い部隊参上です」

「好き好きー。お仕事大好きー。いっぱい頑張りまーす」

作業場の床がガタリと動き、元気いっぱい挨拶と共にわらわらと現れたのは小人族だ。色鮮やかなフード付きの服に踵のない平らな靴を履き、手には軍手やカッターナイフ、筆記用具など作業道具を持っている。フェアが盛況なおかげで手が回らないため、急遽、包装の手伝いを依頼していたのだ。

蓮はさっそく小人族を集めて、仕事の内容と手順を説明した。ラッピング道具は赤とシャンパンゴールドの光沢のある包装紙二種類に、赤・緑・紫・金・銀の五種類のリボン。それと無地のカエ

ル型メツセージカードを用意した。これらを使った包装の仕方と、きつくもゆるくもない華やかなリボンの結び方を実践しつつ教える。

「わーい、上手にできましたー！」

抜群の器用さを誇る小人族は数回の練習で完璧にラッピングをマスターしてくれた。
「忙しそうですね、レンさん」

横から声をかけられて蓮がそちらを見ると、オープン初日に「本屋さんができて嬉しい」と蓮を感動させた若い女性が、ニコニコ笑って立っていた。彼女は腕に二冊の革表紙の本を抱えている。

「こんにちは、いらつしやいませ！ おかげさまで忙しいです」

「ふふっ、レンさんが忙しいってことはお店が繁盛してるってことですね。よかった。本屋さんファンが増えるのは私も嬉しいですよ」

「はい。一人でも多くのお客様にご常連になっていただけるように頑張ろうかな、と。そうそう、先日お求めになった本はいかがでした？ お気に召しましたか？」

すると女性は鼻に皺を寄せてかわいらしい顔を歪め、残念そうに肩を竦めた。

「うーん。思っていたのちよっと違いました。もっとボロボロ泣けるかと思っていたのに、途中からコメディになってがっかりですよ。最後のオチなんて奇想天外すぎて納得いきません！」

憤然として語る女性を、蓮は好ましく思った。物語に一喜一憂する様子はいかにも本好きらしく、共感を持てるのだ。蓮は短く笑って本を受け取ろうと両手を伸ばす。

「そうですか。では、次は当たりだといいですね。お預かりしましょう」

蓮の申し出に女性はまたころっと表情を変えて、人懐こい微笑みを浮かべた。

「あ、この本は父と母への贈り物なんです。『愛の日』用に包装をお願いしますか」

「かしこまりました。では、こちらから包装紙とリボンをお選びください」

「じゃあ包装紙はこつちで、リボンは金にしようかな。大人っぽくラッピングしてもらえると嬉しいです」

まず会計を済ませ、女性の希望通り大人っぽくラッピングを仕上げる。

「わあ、シックでとってもきれいですね。父も母も喜びそう」

「喜んでいただければなによいです。どうぞすてきな『愛の日』をお過ごしくださいませ」

女性は買ったばかりの本を大切そうに鞆にしまい、ふんわりと笑って小さく手を振る。

「ありがとうございます。レンさんも『愛の日』に引っ込み思案な態度はいけませんよ？ 女性だって積極的にかかないと！ お互い頑張って幸せになりましょう」

なぜか発破をかけられてしまった。

でも、こんなふうに背中を押されるくらい親しくなれたのだと思うと嬉しい。蓮は幸せな気分です。店から出ていく女性の後ろ姿を見送った。

なんとなく扉口を眺め続けていた蓮の耳に、おっとりした声が届く。

「メー。ごきげんよう。今日はずいぶんと混み合っていますのね。メー」

声の方を振り返ると、銀河郵便職員の黄色のコートを羽織った白羊がちよこんと立っていた。

「これはメリー様、いらしていたのですね。お待たせして申し訳ありません」

メリーはハート型の蹄のある前足に薄い本を三冊ばかり持ち、善良そうなつぶらな瞳で蓮を見つめている。

渦巻状の角が特徴的な頭をやや傾げて、メリーは楚々と微笑んだ。

「メー。ローちゃんから、本屋さんで面白いことをしているから暇があったら行つて来いと連絡がありましたの。来てみてよかったですわ。『愛の日』に本を贈るなんて素晴らしいことですもの、私もせっかくなのでローちゃんにプレゼントしようと思つて、詩集と画集を選びましたの。メー」
ローちゃんというのは、常連客である人狼族のローハンベルクだ。彼とメリーは幼なじみの間柄で、たまに二人揃つて来店するときは、微笑ましいくらい仲がよい。

蓮はにっこりしてメリーから本を預かり、カウンターでトントンと端を揃えた。

「こちらの画集はローハンベルク様が好まれそうですね。詩集は、普段あまり読まれないようすが、メリー様のおすすめの本とあれば興味を持つていただけるのではないのでしょうか」

「メー。本当にそう思います？ ローちゃん、読んでくれるかしら。メー」

「はい。おそらく、メリー様から笑顔で渡された本は拒めませんよ、ローハンベルク様は」

蓮は生真面目な顔で頷いたものの、愛の言葉を切々と綴つた詩集をしかめ面で捲るローハンベルクを想像してしまい、内心で笑いを堪えていた。しかし、実際、メリーが彼のために選んだ本なら耐えて読むに違いない。

「本が少しでも多くの皆様のお役に立ち、かつ読んでいただけるとお願い企画しましたので、ご賛同いただけることにより嬉しいのです。包装はどのようなにいたしましょうか」

「メー。三冊まとめてお願いできますかしら。メー」

「かしこまりました。少々お待ちくださいませ」

蓮はローハンベルクをイメージして、赤の包装紙にあえて赤と銀のリボンを組み合わせた。メリーのローハンベルクに対する気持ち、が幼なじみ以上なのかどうか、第三者の身としては知る由もない。でも、もし恋心を秘めているならうまくいけばいい、と祈りながら情熱的な仕様に仕上げる。

期待以上の出来栄えだったのだろう、メリーは嬉しそうに蹄を打ち合わせた。

「メー。まあ、恰好い。なんだか強そうですね。メー」

「ローハンベルク様に相応しいかと思ひまして。どうぞ、よい『愛の日』を」

蓮は、心からのエールを込めてメリーに向かい腰を折る。メリーははにかんだような笑顔を見せ、会釈し、弾む足取りで帰っていった。

蓮の手が空いたのを見計らったみたいに、すぐにまた別のお客に呼ばれる。

「あー、『愛の日』フェアの本のことで訊きたいことがあって、いまいいですか」

「ちよつと店員さん、悪いんだけどさっき買った本と、この本を取り替えてほしいのよ」

「これ『愛の日』用の贈り物なんです。一冊ずつ別々に包装してもらえますか？」

あちこちから寄せられる声に笑顔を向けつつ、蓮はきびきびと答えた。

「かしこまりました！ 順番に承りますので少々お待ちくださいませ」

こんな具合で、客足は閉店まで途切れることなく続き、蓮たちは入れ替わり立ち替わりフロアと

レジカウンターを往復し、小人族は次から次へと積まれる本のラッピング作業に追われた。

「ただいま帰りました」

蓮が居候いこうさせてもらっているルーエン・デイーの家は、住宅街の中央にある三階建ての一軒家。一階はエントランスと中庭があり、二階が住居、三階は使用人宅だ。外には厩舎きやうしやもある。

内装は素人目にも趣味がよく、家具や調度は実用性と優美さを兼ね備えた上質なものだ。あちこちにさりげなく置かれた花瓶や彫像、絵画は細部まで美しく、居住空間に華やぎをもたらしている。また同時に、居心地よく寛くわんげる雰囲気ふんいきを醸かし出していた。

「おかえりなさいませ」

帰宅した蓮とジャストワ、ミカジをエントランスで恭うややしいお辞儀と共に出迎えたのは、老執事と白銀の猛獣ハクとザクだ。

ハクとザクはサーベルタイガーによく似ていて、白銀の立派な毛並みに鋭い牙の凶暴そうな姿をしているが、厳ししく躡しけられていておとなしい。蓮にはよく懐いていた。

「よしよし。ただいま、ハク、ザク」

蓮は興奮する二頭をひとしきり撫でて落ちつかせてから、老執事に訊きねる。

「ルーエン・デイーは？」

「ご主人様は本日も王宮よりお戻りになられませんか」

「また？」

「大変お忙しいようでございます」

「そうですか……」

「お食事の準備は整ってございます。お召し替えが済みましたら、食堂へお越しくくださいませ」

ここ連日同じように返される応答に、蓮は溜め息をついて無言で頷いた。白手袋をはめた手を身体の前で交差させている老執事の前をとぼとぼと通り過ぎる。ハクとザクは二頭でじゃれあいながらついできた。

黒い天鵝絨てんがじゆの敷かれた中央階段を上っている途中、蓮はいったん足を止めて老執事を振り返る。

「……ルーエン・デイー、明日は戻られますか？」

できれば会いたい、と言いかけて、迷惑になるかもしれないと思い直し、口を嚙つかむ。

老執事は困ったように眉を寄せ、申し訳なきそうに言った。

「あいにくと、わかりかねます。ご主人様にご用でしたら、伝言など承りますが」

蓮は暗い気持ちになったが、表情を取り繕ってかぶりを振った。ただでさえ忙しいルーエン・デイーを、自分の都合で振りまわすことはできない。なんでもないように笑って付け足す。

「いえ、たいした用じゃないのでいいです。そうだ、今日の夜ちよつと厨房ちゆうぼうをお借りできますか？使った後はきちんと片づけますので、できれば籠かまどの火も落とさないでもらえると助かります」

急なお願いにも老執事は動じることなく、じつと蓮を見つめて気遣わしげに答えた。

「厨房をご使用なさるのはかまいませんが、火の扱いには十分にご注意くださいませ。万が一にもレン様が火傷やけどや怪我などを負われては一大事でございますので」

「ありがとうございます、気をつけます」

蓮が素直に礼を言うと、老執事は上品で控えめな微笑みを浮かべた。

「では、食堂でお待ちしております」

老執事は静かな声で蓮にまどわりついていたハクとザクを呼び戻し、二頭を引き連れていく。別室にてエサを与えるのだろう。

蓮の部屋はルーエン・デイーの部屋の隣で、二階の奥から二番目だ。中に入りコートを脱ぎながら、整理棚の上のガラス鉢を覗き込むと、マチガエルがびよこんと跳ねた。

「マチー」

「うん、ただいま。おとなしくしていたね？」

「マチー」

返事をしているかのような鳴き声にふっと笑みを漏らしつつ、服を脱いでハンガーに掛け、着替える。

このマチガエルは特殊なカエルで、土色から緑色に変色するとイキカエルという別のカエルに変身する。更にイキカエルが一声鳴けば、地球行きの船列車の乗船切符に化けるのだ。

カエルが切符で切符がカエルという、異世界ならではの非常識極まりない変テコなカエルだが、蓮は結構かわいがって飼育している。

蓮はマチガエルにエサと水をやってから、夕食をとるため食堂へ向かった。食堂ではすでにミカジとジャストワが待っていて、蓮が席に着くと老執事が優美な手つきで給仕を始める。食事中、ミ

カジやジャストワと他愛ない会話をしながらも、蓮の視線は無意識のうちに、一つだけ空いている席へと向けられた。

ルーエン・デイーの不在は、これまでだつてたびたびあった。だけど今回はもう十日以上になる。こんな長い間会えないことは一度もなかった。仕事だから仕方がないとはいえ、やはり寂しい。

空席を視界の隅に捉えたまま、蓮はつらつらとルーエン・デイーのことを考える。

彼は蓮がこの国で最初に出会った人物で、本屋を作るきっかけをくれた人だ。開店までこぎつけられたのも、なに不自由なく異世界で暮らしてこられたのも、全部ルーエン・デイーのおかげで、蓮にとつてはかけがえのない大恩人。いまでは誰よりも信頼している。

ルーエン・デイーはすこぶるいい男で、長い睫に縁取られた真つ黒な眼は優しく、額にかかると艶やかな黒髪は憂いを帯びた美貌によく似合う。

悠然とした物腰ながらも圧倒的な存在感があり、時折ぞくつとするほど色っぽい。うっかり見惚れていると心を奪われそうな危険な魅力に溢れている。

容姿が優れているうえに、親切で誠実かつ、頼りがいがあるなんて、ちょっとできすぎだろう——と言いたくなるくらい欠点らしい欠点が見当たらない。

蓮が知る限り、どこにも非の打ちどころのない美貌の王、それがルーエン・デイーだ。

食後、蓮は部屋でぼーっとへ白騎士の書」を捲っていた。やがて、厨房が使用できると老執事から知らせがあり、さっそく準備に取りかかる。エプロンをして袖を捲り、入念に手を洗ってから薄

い手袋をはめて、事前に用意していたお菓子の材料と調理器具を揃える。

フォーチュンクッキーを焼き、明日の『愛の日』に、皆にプレゼントするのだ。

『愛の日』について知ったとき、日頃お世話になっていることへの感謝の気持ちを込めて、なにか贈ろうと決めたものの、なにぶんプレゼントを選んで買いに行く時間がない。悩んだ末に採用した案がこれだった。

フォーチュンクッキーは二つ折りにした薄いクッキーの中に、運勢やメッセージを書いた紙片を挟んだもの。自分の気持ちを楽しく形にできる、笑顔を運ぶお菓子なのだ。

「よし、始めよう」

自分に気合を入れるため、蓮は開いた掌にパシッと拳を打ち込んだ。

材料は卵白、砂糖、薄力粉、バター。

作り方はシンプルで、手順を間違えずコツさえわかっていたら失敗はしない。卵白をほぐすことから始めて、白い泡が立つたら砂糖を投入。サツと混ぜて溶かし、二度ふるっておいた薄力粉を入れ、粉っぽくなるまで混ぜ合わせたら溶かしバターを加える。あとは全体が滑らかになったら生地地完成だ。

「問題は竈の温度なんだよなあ……これくらいかな？」

蓮は竈の前に仁王立ちし、火傷に注意しながら火加減を確かめる。温度の微調整はできないので、せいぜい焦げないように見守るしかない。

天板に薄いシートを敷き、生地を落として丸く薄く広げ、狐色になるまで焼く。焼きすぎると曲

げるときに割れるから、焼き加減は要注意だ。

焼き上がったら素早く丁寧二つに折り曲げて、小さくたたんだ紙片を入れる。この紙は、蓮からのメッセージを記したものだ。

メッセージは、就寝前の時間を利用して毎日せっせと書いた。

ルーエン・ディー、ミカジ、ジャストワ、リヒトの分は、蓮から見たそれぞれの美点や魅力を書き出した。普段、口ではなかなか言えないことでも、文字にすると照れが半減するのか、褒め言葉がすらすらと出てきて驚いた。老執事やメイド、小人族に配る分は日頃の献身と労働、親愛と友愛に対する感謝を認めている。お世辞にも達筆とはいえない筆跡だけれど、気持ちだけはいっぱい詰めた。

「最後の仕上げは……」

蓮はエプロンのポケットに忍ばせていた〈白騎士の書〉を意識しながら、熱冷ましのため金網に並べたクッキーの上に両手を翳した。

ちよつと緊張しつつ、皆の幸せを願い〈祝福のおまじない〉をそつと唱える。

「マテラ・シシル」

このおまじないがどれだけ効果のあるものなのか自信はない。もしかしたら効き目など全然ないかも知れないけれど、そこはそれ、ご愛嬌だ。要は気持ちである。気持ちが込もっていることが大事なのだ。試しに一つ、味見用に焼いたものを食べてみる。サクサクした食感も味もよし。でも、残念ながらおまじないの威力は実感できず、ちよつと拍子抜けしてしまう。

「……変に期待されても困るし、おまじない付きのクッキーということは内緒だな」
クッキーが冷めて固まるのを待つ間、調理器具を洗い、竈の火を消して、厨房を片づける。それが終わったら、最後の仕上げはラッピングだ。クッキーが誰宛てのものかわかるように、紙袋は全部違う色を選んでいる。それらに冷めたクッキーを入れて、金色のリボンで袋口をキュッと結ぶ。「できた」

我ながら満足のいく出来栄えだ。

予定より大幅に時間はかかったものの、なんとか形になった。後は明日、皆に手渡しするだけだ。「喜んでくれるといいな……」

問題はルーエン・ディーだが、もし明日会えなかったら今回は諦めて自分の胃袋に納め、次の機会を待とう。

蓮は「ふわあ」と大欠伸をした。急な睡魔に襲われて時計を見ると、とうに深夜をまわっている。どうりで眠いはずだ。

明日はいよいよ『愛の日』だ。

いい一日になればいい、と願いながら蓮は厨房の明かりを消した。

二

孔雀緑海の月の九日、『愛の日』。

開店前、事務室兼休憩所で朝のスタッフミーティングを終えて解散する寸前、蓮は「待った」と皆を引き止めた。ソファで大きく伸びをしていたミカジ、腰を半分浮かせたジャストワ、一足早く起立したりヒトの三人が動きを止めて蓮の方を向く。

「開店前に渡したいものがあって」

蓮は自分の作業机の上にあった手提げ袋を取ってきた。それをテーブルに置き、中からガサゴソと赤・銀・青の紙袋を取り出す。赤はミカジ、銀はジャストワ、青はリヒト。皆のイメージカラーだ。

「ささやかですけど、『愛の日』の贈り物です。いつも仲よくしてくれてありがとうございます」

これからどうぞよろしく、と告げてペコリと頭を下げ、蓮は一人一人に紙袋を手渡した。

三人の反応は鈍かった。彼らは紙袋を手持ったままポカンと口を半開きになっている。

ややあってから、赤い紙袋を豊満な胸に軽く抱いたミカジが、珍しくはにかなだように笑う。

「まさか今日、レンから贈り物をもらえるなんて思わなかった。嬉しいわ。ありがとう、レン」

次にジャストワがわざとらしく咳払いをした。彼は眼鏡の蔓を指で押し上げ、銀の紙袋をしっかりと